

叱る

2021. 3. 15

アーティスティックスイミング日本代表ヘッドコーチの井村雅代さんの「人を叱る三つのコツ」というお話を紹介する。

いま、スポーツ界で叱る教育の代表といえば、すぐに私の名前が挙がります。でも、私の中では叱っているという意識は全くありません。

下手だから下手、ダメだからダメ。本当のことを言っているだけなんです。そして本当のことを言ったら、私は必ず直す方法を言います。

一つの方法だけでは直りませんから、今度はこうやってごらんと、どんどん次の直し方を言う。そして直ったと思ったら、「それでいいよ」とちゃんとOKを出すんです。でも取材に来られるマスコミの方は、私が怒っているところばかり撮るから、ああいう恐ろしい映像になるんです。

ここで皆さんに叱るコツをお教えするならば、叱る時はまず現行犯で叱ってください。いまのそれがダメなんだって言われたら、人間は反省します。

「君、この前も同じことを言ったよ」と古いことを持ち出してはいけません。これをやられると、いまやったことへの反省が薄れてしまうんです。もう一つしてはいけないのは、しつこく叱ること。それは本人の自己満足で、聞いている人は「もう分かったよ」って嫌気が差してくるんです。

現行犯で叱ること、古いことを持ち出さないこと、しつこく叱らないこと。この三つの叱るコツをぜひ覚えてください。そして、叱る時は本気でかかってください。相手がどんなに小さなお子さんでも、自分に本気でぶつかってくれているかどうかは分かるんです。中途半端に叱るくらいなら、最初から知らん顔をしているほうがましです。

叱るとは、いま自分の目の前にいるこの人は、絶対にこのままでは終わらないんだ。いまの状態よりも必ずよくなるんだと、その人の可能性を信じることなんです。だから本気でぶつかり、よくなるまであの手、この手で引き上げようとする。叱るとは、その子の可能性を信じるということなんです。

学校で働く教員にとって大いに参考になる内容である。生徒指導における要諦と言ってもいいかもしれない。本気かどうかは相手に伝わる。ごまかしはきかない。特に子どもは敏感である。すぐに見透かされる。

「怒る」と「叱る」の違いについては、昔から言われてきている。時代が変わってきたのか、以前よりも叱る場面は減ってきているように思う。だからといって、大人が叱れなくなるようではいけない。怒ってしまうのではなく、相手のことを思って叱ってあげられる大人でありたい。自分のことを振り返っても、本気で叱ってもらったことは、必ず役に立っていると言える。